第 3 版の出版にあたって

本書は、現代を生き抜くための「知の力」を、大学で身につけようとしている皆さんのための本である。大学では、既存の知識を身につけるだけでなく、世の中に溢れる情報を精査し、整理し、問題を発見し、さらにその問題を解決する方法を見いだして、自分なりの結論を導き、それを人に効果的に伝えられるようになることが期待されている。この本では、そのひとつひとつの作業に関わる技術を、なるべくわかりやすく解説している。具体的には、レポート・論文の作成、研究調査と研究発表の実施に直接的に役立つ内容となっている。

本書を手にした大学生の皆さんには、すべての物事について批判的に考え、自律して思考する力を、大学生活を通じて身につけてほしい。この本は、その手助けとなることを目指して書かれている。

この本はもともと、大学 1 ～ 2 年生の初級セミナーなどでの教科書として書かれた。初版以来、累計 12 万部以上が学生の皆さんの手元に届けられた。その間、学生や教師の諸氏からたくさんのフィードバックをいただき、第 2 版、そして今回の第 3 版の改訂に役立てていった。

本書の成立は、慶應義塾大学教養研究センターで行われたリベラル・アーツ教育のための実験授業「アカデミック・スキルズ」での取り組みにさかのぼる。本書は、そこでの教授内容を土台に作られた。第 1 と第 4 章は故湯川武、第 2 章は横山千晶、その他の部分は佐藤望が行った授業をもとにしている。初版の出版の際には、佐藤望がとりまとめ全体としての統一を図った。第 3 版は、佐藤望が全体の改訂案を作り、横山千晶と内容を精査して完成した。

第 3 版での主な修正点は以下の通りである。まず第一に、初年次教育はもちろん、卒業論文を準備する段階でも、基礎を確認するため参照するに耐える記述となるよう、加筆修正していった。本書に寄せられた声には、本書が上級学年のセミナー論文やレポート、また卒業論文をまとめる際にも十分に役立つという内容が多かったためである。

第二の修正点は、出版物や情報伝播手段が紙からインターネットにシフトしつつある現状を反映したことである。第2版の出版から7年間、情報技術の発展とそれに伴う莫大なインターネット上の情報蓄積は、学問研究に大きな変化をもたらしている。第2版を読み返して、この短期間にその内容の一部が相当に古めかしいものになってしまっていたことに驚愕する。この変化は、主に第3章の大幅な改訂に反映している。

第三の大きな改訂点は、巻末の「書式の手引き」の全面改定である。近年、文献表記の書式が、著者・出版年の順に書かれるケースが増えており、その変化に対応した。また、電子化された情報を文献表や注にどのように掲載するかが、第2版では曖昧となっていた。その問題を改善した。

また、各章末には、「アカスキ・シリーズでもっと学ぼう！」という項目を加えた。慶應義塾大学出版会による「アカデミック・スキルズ」の教科書シリーズは、現在本書以外に6冊が出版されている。さまざまな疑問をもった学生が、これらの教科書からより詳しい記述に触れることができるようにという配慮からである。本書の至らない部分を、同僚諸氏によって執筆されたこれらの本が補ってくれることを確信している。

調べ、読み、書き、まとめ、伝える一連のリテラシーを学ぶことの重要性は、いくら情報化が進んでも、またどのような学問分野であっても、少しも揺るがない。4年間のどの学習段階の学生も本書を繰り返し参照することによって、次のステップへ進むきっかけを掴んでほしい。

本書の出版は、慶應義塾大学でアカデミック・スキルズ授業に関わった多くの教員各位の助言と支え、また慶應義塾大学出版会の編集者諸氏の粘り強い努力、そして授業に参加してくれた学生諸君、読者諸氏のさまざまなフィードバックによって実現した。これらのすべての方々に、心からの感謝を表したい。

2020年初春

佐藤　望

横山千晶

Contents

第 3 版の出版にあたって …… 3

第 1 章　アカデミック・スキルズとは …… 7
1. アカデミック・スキルズとは …… 8
2.「知」とは、「教養」とは …… 10
3.「知」と「教養」を伸ばす …… 14
4. 問いを立てる――研究の出発点 …… 17
5. 研究テーマの三箇条 …… 19
6. 出発にあたって知っておくべき大切なことがら …… 23

第 2 章　講義を聴いてノートを取る …… 29
1. 大学の講義の特徴とノート・テイキング …… 30
2. 何のためにノートを取るか …… 31
3. ノートを取ることは「人間観察」でもある …… 32
4. 具体的なテクニック …… 36
5. 良い聴き手となるために …… 40

第 3 章　情報収集の基礎――図書館とデータベースの使い方 …… 43
1. 情報に対するアカデミックな態度 …… 44
2. 文書資料の種類、特徴、利用法 …… 47
3. ウィキペディアについて …… 56
4. 資料検索の方法――データベース活用法 …… 59
5. 文献一覧をつくる …… 71
6. 文書以外の情報収集――実地調査、データ収集 …… 72

第 4 章　本を読む――クリティカル・リーディングの手法 …… 77
1. 本を読み始めるにあたって …… 78
2. 批判的・論理的思考 …… 81
3. クリティカル・リーディング（批判的読解）とその練習 …… 82

第 5 章　情報整理 …… 95
1. 記録することの大切さ …… 96
2. 紙と情報機器を駆使したノートの作成方法 …… 97
3. 情報カードのつくり方の一例 …… 105
4. レポート、プレゼンテーション作成準備の
最終段階：アウトラインをつくる…… 109
5. KJ 法について …… 111

第 6 章　研究成果の発表 …… 119
1. 研究のアウトプット …… 120
2. 学問的問いとは何か …… 121
3. 明晰かつ論理的であること
——論理を曇らせる禁じ手について…… 127
4. デジタル情報技術とアカデミック・スキルズについて …… 133

第 7 章　プレゼンテーション（口頭発表）のやり方 …… 139
1. プレゼンテーション（口頭発表）について …… 140
2. プレゼンテーションのツール …… 146
3. その他の大切なこと …… 149

第 8 章　論文・レポートをまとめる …… 153
1. 論文・レポートを書くとは …… 154
2. 引用の仕方、注の付け方 …… 160

附録　書式の手引き…… 167

第１章

アカデミック・スキルズとは

1. アカデミック・スキルズとは

教育の目的は、学問を通じ、幅広く深い教養をもち、社会性豊かな人間を育てることである。さまざまな議論があるかもしれないが、ここではこのことを出発点としよう。

「教養」を身につけるためには、まず基礎となるものを学んでおかなければならない。「教養」という建物を大きく高いものにするためには、しっかりとした強固な基礎が必要である。

それでは、「教養」の基礎とは何か。よく「読み・書き・そろばん」と言われるが、文字を読むこと、書くこと、数量的な概念と技法をもつことは、人間社会が高度の文明文化を継承し、発展させるために最低限必要な能力である、とされてきた。教育制度が、いまのように整ってない時代から、子供たちや若者の教育は、この3つの養成を目指していた。

本書で説こうとする「アカデミック・スキルズ」とは、本質的に同じような意味をもつ。それは、学問の目指すより幅広く深い教養を身につけるための基礎的技術、「大学で学ぶための基礎的技法」である。大学で学問を行う者にとって、必須の技法あるいは技術のことを、本書では「アカデミック・スキルズ」と呼ぶことにする。「アカデミック・スキルズ」は、教養そのものではない。これから一生かけて築いていく幅広く深い教養を積み上げるための、基礎となるものである。

◉問いの発見

高等学校までの学習では、多くの知識を暗記することが求められることが多い。しかし最近では、「既存の知識を暗記するだけではだめだ、自分で考えて答えを出しなさい」とよく言われるようになっている。それに、戸惑った人もいるだろう。

大学では、出される課題がより複雑になる。その答えを出すには、さらに多くの背景知識を必要とする。さらに、大学の勉強では、「**問いそのものを自分で発見する**」ということが求められる。そして、その問いに教師は、必ずしも決まった答えを用意していない。というか、決まった答えは往々にしてないのである。しかし、決まった答えがないからと言って、どんな答えも正しいというわけではない。自分自身で、明確な根拠を示し、論理的に説得できる答え、それが正しい答えとなる。それだけではない。そこで導き出された答えは問いの考察そのものに貢献することでもある。

ますます情報化が進む社会の中では、情報を評価し、精査し、取捨選択する能力が求められる。私たちに突きつけられているさまざまな問題がどこにあるのか、その問題を解決するために、より価値の高い情報とは何か、それを見極め、より説得力のある答えを出していくこと、その答えを通して広く問いの考察に貢献する気概をもつこと、これが、大学における「学問」である。

◉なぜ自分で問いを発見しなければならないか

皆さんは日常のなかで、ある問題について考えれば考えるほど何が何だかわからなくなる、という経験はないだろうか。実のところ世界に存在する困難な問題のほとんどは、考えれば考えるほど問題の所在がどこにあるのかわからなくなってしまうものである。そのなかから、本当の問題の所在はどこか、その問題の本質は何か、ということを自ら発見する能力が、大学では問われている。

実際、答えを導き出すことより、問いを発見することの方がずっと困難な作業である。問題が適切に発見できれば、その問題は8～9割方、解決していると言うこともできる。

問題を発見するためには、幅広い基礎知識に加え、理解力、洞察力、思考力、感性が必要となってくる。大学で知的技法を身につけることとは、基礎知識の暗記だけで終わらない、理解力、洞察力、思考力、感性の部分を錬磨するということでもある。それこそが大学で身につける「**教**

養」である。

2. 「知」とは、「教養」とは

◉教養と人間生活

混沌とした世の中を生き抜いていくためには、そして豊かな人間生活を送っていくためには、幅広く深い「教養」が不可欠である。教養とは、**多角的なものの見方であり、問題を発見し解決することのできる力である**と言うことができる。私たちが、将来どのような道を歩むにしても、一見目的にかなっていると思った行動に、思わぬ落とし穴が潜んでいることがある。利潤を一直線に追求しようとした経営者や、権勢拡大のみをめざした政治家が、その手段を見誤り思わぬ犯罪に手を染め、自らをおとしめてしまうという例は、枚挙にいとまがない。

教養がある人間とは、**多角的にものを見て自らを客観化し、問題発見をしながら正しい道を見いだしていくことのできる人間**である。そして教養は、経済的に豊かであるということと別の意味で、豊かな人間生活を保証するもののひとつである。

基礎的な教養がなければ、専門知識や技能を身につけることができない。しかし、現代社会は、特定の専門的知識や技能をもっているだけでは立ちゆかない社会となっている。専門知識はつねに流転するし、専門技能もやがて陳腐化するからである。そうした知識や技能をさらに上へと高めてくれるものも、また教養である。つまり、**教養とは、人が一生をかけて追求するべきものなのである。**

言葉を換えれば、次のように言うこともできるだろう。人は誰でも職業を得て生きていかねばならない。職業は社会の要求に応じて形成され、それに就くにはそれなりの専門知識や技能が必要である。しかし、社会

が変化すると職業に要求される内容も変わってくる。そのときには、それまで培ってきた技能や知識を生かしながら、新しい要求に応じた新しい技能や知識を自らのなかに蓄えていかなければならない。そのことを助けてくれるのが「教養」ではないだろうか。世界や社会や自然や人間活動やその他さまざまな事項について、より広く深い関心を呼び覚まし、理解力、洞察力、思考力、感性を高めることが「教養」であるとするならば、それは**変化に富んだ時代を生き抜くために、しかも豊かに生きるために人が欠くことのできないもの**なのである。

◉知と知識の違い

教養の本質は「知」である。「知」という言葉は、ややもすれば「知識」と混同されがちだが、いわゆる「知識」は、「知」の一部でしかない。伝統的な職人の技はいわゆる「知識」ではなく伝統と訓練のなかで身体に蓄えられた「身体知」である。人類の長い歴史を通じてさまざまなタイプの「知」が受け継がれてきた。文明の営みのもっとも重要な働きのひとつは、このような「知」の継承にある。他方、人類は変化する諸環境のなかで、さまざまな「知」を新たに生み出してきた。文明とは、まさにこの継承と発展から成り立っている。**教養とはこの「知」の継承と発展を支える枠組みである**と言えるだろう。

人はそれぞれの立場で、多かれ少なかれこの「知」の継承と発展に関わっている。ことに大学で学ぶ者には、社会からこの点において大きな期待が寄せられている。さまざまな「知」の継承と発展こそが、大学のもっとも大きな使命であり、学生はこの社会からの負託に応えるために、自らのもつ知的能力を生かし、かつ伸ばしていかなければならない。

◉論理性と批判的態度

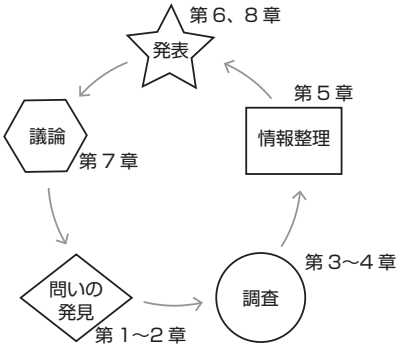
「知」の継承と発展において、もっとも大切なことは、論理性と批判的態度を養うことであろう。論理的に考え、かつ伝えること、そして何事も鵜呑みにはしないで、自ら確かめたり、検証してみようとすること。このような知的な態度は、ひとりひとりの、ひいては社会全体の「知」の

継承と発展に不可欠である。

教養を身につけるのに非常に重要なことは、英語で言うならば、“How do you know what you know?”と問うことではないだろうか。私たちが何かを知りたいと思ったら、インターネットで検索をかけると、多くの情報が提供される。しかし、そこには正しい情報に混じって、不正確な情報、誤った情報も非常にたくさん含まれている。伝聞で聞いた内容を鵜呑みにして信じ込み、それを無意識のうちにうわさ話として拡げてしまったという経験をもっている人も多いだろう。だが、よくふり返ってみよう。われわれが「知っている」と思った情報は、どこから来たのか、本当に正しい知識なのか、それは信じるに足ることなのか。このように、**私たちが知っていることをもう一度問い直し、確かめてみること、**これが批判的な検証であり、本物の知識の構築には欠かせない作業だ。

もちろん、何でも疑ってかかれと言っているわけではない。また、批判的検証とはむやみに反対のことを述べて、あまのじゃく的な批判をするということでもない。自らの知識と経験に照らしながら、あることが正しいと判断できるか、その事項の信憑性があると判断するに十分な根拠があるか、ということをとらえ直していこうとする批判的態度が、知的な活動、学問において重要な基本態度である。

●アカデミック・スキルズのサイクル●



＊章は本書の該当箇所

◉知のスパイラル——高み目指して

本書は具体的には、問いを立て、調査し、情報を整理し、プレゼンテーションや論文のかたちで発表するという、大学における知的作業の一連の流れを解説している（左図を参照）。これらの1サイクルの作業は、必ず新たな問いの発見に繋がる。あるテーマについて取り組み、そ

れを発表し議論するうちに、また新たな疑問が生じてくるのである。

これらの作業は、単なる循環ではない。1サイクルが終わり、さらなる問いを発見をしたときには、その問いはよりレベルアップした問いとなる。そしてその循環は、螺旋（らせん）をたどって繰り返され、高みへと向かっていく（右図を参照）。ここに学問の醍醐味がある。

●アカデミック・スキルズのスパイラル●

このサイクルは、初学者、卒論段階の学生、大学院生、講師や教授たち、のみならず社会に出たときに人々が行う調査や研究に関しても、同じように当てはまる。もちろん、高学年になって専門分野が決まってくると、その専門ならではの研究方法や知識はある。しかし、問いを発見し、一定の方法論を定めて研究し、発表をし、議論し、新たな問いを発見するというサイクルは、文系・理系どの学問分野でも、同じである。

本書で解説するアカデミック・スキルズは、できれば大学入学後なるべく早い時期に身につけてほしいものである。しかし、より専門性の高いセミナー論文や卒業論文を書く段階で、その必要性・重要性に気がつくことも多いだろう。その時にも決して遅くない。いや、それに気づいたときにこそ、本書の各部分を丁寧に読み、自らの学びに生かしてほしい。卒業論文の作成には、迷いや挫折がつきものである。しかし、つまずいたときにこそ、本書を広げてみてほしい。必ずそれを乗り越えるヒントが見つかるはずである。つまり本書の利用そのものが、皆さんの知のスパイラルへと繋がるのである。

3.

「知」と「教養」を伸ばす

◉アンテナを張る

大学には、高等学校までの段階では想像もつかなかった数の科目が用意されており、いったい何を学び研究するのかもわからないような学問分野の科目がたくさんある。初めから大学に入ったら、何を学ぼうという目標をもっている学生もいるだろうし、入ってから考えようという学生もいるだろう。いずれにしても、大学に入ったらアンテナを広く高く張って、自らの知的世界と見識を広げていくためには、どうすれば良いかということを授業のなかから感じ取って欲しい。まずは自分がどんな事柄に興味があるのか、その事柄をどのように見ていくのかをじっくり考えてみよう。そしてひとつの事柄を見るにも、いろいろな観点があり、その観点に対応したさまざまなアプローチの方法があることを、授業を通して学んで欲しい。

◉何に興味があるか、テーマを見つける

とにかく好き嫌いの先入観をもたずに、さまざまな観点やアプローチの仕方に触れてみることがまず大事であるということは、いま述べた。しかし、関心をもった事柄や分野すべてについて、短い時間で、より高度にかつより深く極めることは普通の人にはできないことは明らかである。もっともっと広く深く学ぶことは、とりあえず将来のこととして、まず基礎を築かなければならない。そのためには先ほども述べたように自らの知的関心、あるいは知的好奇心がどこにあるのかを見つけ出すことが大切であろう。

何に興味を惹かれるか、何が面白いと思うか、自らによく問うことが必要である。初めのうちは、自分が関心や興味があるのは、いったい何

なのかはっきりわからない人もいるかもしれない。また、それとは逆に、関心のあることがあまりにも多くあって、あるいはあるような気がして、自分でも収拾がつかない人もいるかもしれない。どちらの場合でも、自分に問い直してみる必要があるだろう。本を読んだり、他人の話を聞いたり、その他さまざまな知的体験を積んで自らの考えを深めていく必要がある。そしてその結果、何かひとつだけでも自らの知的関心を引きつけるものを見いだすことができれば大成功である。あるいは、漠然とした多数ではなく、いくつかの異なる分野に絞り込むことができれば良い。

◉なぜ面白いと思うか、他人にもそれを説明できるか

自分自身の知的関心や興味の対象のテーマや分野が、ひとつ、あるいは、いくつか見いだせたら、それが自分にとってなぜ「面白い」のか問うてみよう。人間が何かを選択することには、極めて多様な要素が絡んでいる。直感的な「好き、嫌い」とか「楽しい、つまらない」といった説明しにくい部分もあるだろう。しかし、**知的関心の対象であるからには、知的な判断、すなわちきちんと順序を踏んで論理的に説明できることがあるはずである。**そこのところを自らきちんと整理して考えてみると良い。

一言で言うと簡単な作業のように見えるが、実際にはこれはとても難しい作業である。自らの知的世界の全体像のなかで、取り上げるテーマや分野がどのような位置を占め、どのような意味をもっているのかを見極めるということに他ならないからである。ただし、このような作業をまず完全にしておかなければ次に進めないというわけではない。そうするには人の一生はあまりに短いし、人の心と頭はあまりに揺れやすいからである。むしろ、不完全ながらとりあえずの整理をつけて、前に進むしかない。ただし、自らに「なぜ」と問い続ける心構えだけは忘れないようにしたい。

ここでもうひとつ大事なことがある。それは、**自分なりに整理した「なぜ」を他人に説明すること**である。他人に説明するには、自分のために整理した以上に論理的に丁寧に整理しなければならない。自分にとっ

てはよくわかっているので説明不要のことであっても、他人には論理の飛躍や逸脱としか取れないこともしばしばあるからである。

他人に説明する際にはAだからB、BだからCときちんと順序を踏まなければならない。このことは、論文やレポートを書く場合にも当てはまる。物事を考えその結果を他人に伝えるためには、きちんとした論理がとても重要な「鍵」となる。

◉知的自己確認=アイデンティティの確立

自分がどんなことに関心があるのか、何を面白いと思うのかを知ることは極めて重要である。そのためには、まず自分で自分に問いかけ、そして自分のなかに答えを見つけ出し、そしてそれを確認しなければならない。まさに自分探しである。つまり「**私はいったい何者であるのか**」という問いを広い世界のなかで、問うことである。このような経験なしに、自己を確立することはできない。この経験は、与えられた課題をこなすだけでなく、積極的に自分の興味や関心を見つけ出し、それを伸ばしていくことにつながる。またそのような興味や関心を作り出してきた背景を知り、さらに異なる知の世界へと自分をひらく土台ともなる。自分自身を客観的に見つつ自らを確立していくこと、これはすなわち自らのアイデンティティの確認となる。

自らが見いだした知的興味や知的好奇心を大事に伸ばすと同時に、それを広げ深めるように努めること、また絶えず客観視して見直すことも忘れてはならない。これこそが自分だと言える何かをしっかりともつことは大切であるが、それに固執し自縄自縛の状態にならないように、つねに柔軟な知的感受性も養う必要がある。

4. 問いを立てる――研究の出発点

◉学問=「学んで問う」

たとえ完全で明確にではないにしても、自らがいま（もしかしたらこれからの長い間）学び、研究したい分野やテーマが少しずつ見えてきたら、次のステップに進もう。

大学とは、自ら選んで入る高等教育の場である。自ら選ぶということは重要な意味をもっている。すなわち、そこは何らかの強制力を感じさせる「勉強」をする場というよりは、基本的に「**学問**」をする場だからである。

それでは、「学問」とは何であろうか。「学問」の定義はさまざまであろうが、本書の主題に関連して言えば、**「学」んで「問」う**ことである。大学に入ると、これまでに触れたことのある分野や事項もあれば、まったく聞いたことも読んだこともないような新しい分野もあることに気付くだろう。大学の授業は「〇〇学」とか「××論」とかいうような名前がついているものが多くある。それ以外のものも含めて、すべてが広い狭いは別にして特定のテーマを扱っている。このテーマは言い換えれば、「問題」である。授業では教師がある時間をかけて、その「問題」を説明し、結論となる「答え」に至る方法やその過程の具体的内容、そして結論としての「答え」そのものについて講義する。

学生もこれと同じ道筋をたどって「学問」するのである。授業を通じ、また自らの学習経験を通じて、自らの知的関心＝学問的関心がどのあたりにあるのかを探るのが最初のステップだとすると、第2のステップは関心をもった分野やテーマについて、何が問題なのかを考えることである。自分なりに「問い」を立ててみること、これが重要である。よく「あの人は学問がある」とか「教養がある」とかいう表現が使われるが、

幅広い分野の基礎知識をもっていて、その知識の量をひたすら増やしているだけでは、本当の意味での学問をしたことにはならない。既にあるものを受け継いだという受動的な意味しかない。「学問」とはそのうえに、**自らが関与するという能動的な面を必要としている**のである。

◉「問い」を見つける

自ら能動的に問いを見つけるという作業は、そうたやすいことではない。それはひたすら経験と実践によって身につけることができる能力だからである。自分の頭のなかで直感的に鋭い「問い」を投げかけることのできる学生もたまにはいるが、多くの学生はこれまで学んだことのなかから、いろいろと考えて「問い」を見つけていくだろう。ここで発揮されるのが、前にも述べた「**知的好奇心**」と「**批判的態度**」である。私たちは自分が関心をもったテーマや分野について、大学の授業、書物、インターネット、その他の媒体を通じて、さまざまな知識や研究成果を知ることができる。そこから生じた疑問や批判は、どんなに幼稚と思えることであっても、どんな些細なことであっても大切にしておくと良い。絶えず自分の問題を見つけようとする態度こそが肝心である。そして、その「問い」をノートの端にでもメモしておくと良い。学べば学ぶほど問いは増し、内容的には深くなっていくはずである。

◉個人的な「問い」から学問的「問い」へ

これから調査や研究を進めていくにあたってさしあたり設定したテーマや問いが、レポートや論文、あるいは口頭発表（プレゼンテーション）といった学問的成果にまで到達できるかどうか、ということを初学者が判断するのは難しいかもしれない。

いずれにしても研究の過程では、**これまでもっていた個人的な「問い」を、公共的・普遍的な「問い」へと変えていかなければならない**。実際の研究発表やレポートのなかにおける問題設定の仕方については、「第6章　研究成果の発表」のところでもう一度詳しく述べることにするが、学問的な問いは公共的・普遍的なものでなければならない。

「今日何が食べたいか」という問いは学問的な問いになり得ないが、「どのような食べ物が体に良いか」という問いは学問的問いになり得る。「留学生の張君はどんな幼少時代を過ごしたのだろう」という問いは極めて個人的であるが、「中国福建省の現代初等教育制度について」という問いは、やりようによっては立派な学問的テーマとなり得る。

研究テーマが、個人的な問いから発しているということは決して悪いことではない。しかし、それが主観的な問いにとどまっている限りは、それを研究テーマにすることはできない。例えば、「私はなぜ花子さんが好きか」という問いは、それ自体あまりにも個人的な問いである。「私」を主語にした感情的な思いに基づく問いは、学問的「問い」とは言えない。私が花子さんにあこがれるその思いはたしかに人間一般に通じる思いかもしれない。しかし、それは広い意味での文学の題材になり得ても、学問的研究そのものではない。学問研究の問いは、一般的正しさや妥当性を論じるものでなければならないからである。もちろん、この問いを「愛とは何か」という問題に置きかえることができるならば、方向としては正しい方向に進んでいるということができる。しかし「愛とは何か」というタイトルで論文やレポートを書くことはできない。後でも述べるように、それはあまりにも多義的でつかみどころがない問いだからである。しかし、「万葉集における愛の表現について」とすれば、そこから的確な学問的問いを導き出すことは可能になってくる。

5. 研究テーマの三箇条

テーマとその問題設定をはっきりと定めることは、実際には論文を書く段階になって初めて可能となるが、とりあえず研究の方向性を定めるために「仮」のテーマを決めたり、問題設定をしたりする際には、以下

の点に注意すると良いだろう。

◉第 1 条　対象が明確か

第 1 の条件は、扱おうとしている対象がはっきりしているかどうかということである。これは、言い換えれば、**問題がひとつに定まっている**かということである。初学者はしばしば、抽象的で対象のはっきりしないものをテーマにしようとすることがある。例えば「宇宙とは何か」という問いは、さまざまな意味で根源的な問いではあるが、実際にはこれを初学者が論文のテーマにすることはできない。表面的にはひとつの問いのように見えるが、いくつもの問題を含んでおり、あまりにも漠然として答えが出せなかったり、あるいはどのような答えでも成り立つような問いだからである。しかし、この問いは「いま私が『宇宙』について一番知りたいと思うことは具体的に言うとどんなことであるか」という問いに置き換えれば、学問的な問いを導き出すことが可能である。その他、前述した「愛とは何か」、「人間にとって『見る』こととは何か」とか、「なぜ『命』は大切か」、といった問題も、あまりにも大きな問題であり、さまざまな問題を複層的に含んでいるため、そのままでは研究テーマにすることは難しいだろう。しかし、それを出発点として、問題をひとつに絞り込んでいけば、そこからすばらしい問いとその答えを導き出すことは十分に可能である。

◉第 2 条　方法が明確か

学問において重要なことは、その対象よりもむしろ方法である。つまり、何を研究するかという以上に、**いかに研究するか**ということだ。学問には比較研究や事例研究、資料批判研究、実証研究、理論研究などのさまざまな方法がある。それぞれについての説明はとりあえず置いておくとしても、調査研究の各段階で、いま何をどのように調べていけば良いかという方向性がつねに見えていることが大切である。

研究を続けていると、次に何をどう調べれば良いかわからなくなり、研究活動そのものが暗礁に乗り上げてしまうことがよくある。これは、経

験を積んだ研究者にも頻繁に起こることであり、初学者にとってはなおさらである。もし、次にどういうステップへ進めば良いかわからない場合は、問いの立て方、問題設定の仕方、テーマ設定に何らかの誤りがある可能性を疑わねばならない。別の言い方をすれば、研究活動はつねに進めていけるところから進めていくのが良い。

方向性がつねに見えていることが大切といま述べたが、初めの段階で最後まで見通しが立っている、すなわち結論が見えている必要はもちろんない。そうだとすれば研究をすることそのものの意味がないだろう。しかし、このような方法で調べていけば、ここに到達できそうだという見通しはつけておいた方が良い。そうした見通しは、経験を積めば積むほど見えてくる。教師や先輩に相談するのも良いだろう。

もう一度言おう。**先に進めなくなったら、何かが間違っている。**もとに戻って考え直し、進むことのできる箇所を探そう。

◉第 3 条　扱う情報量が使える時間に対して適切か

現代の大学生は忙しい。サークル、バイト、語学、インターンシップ、ダブルスクールをこなしながら、がんばる学生も多い。そのなかで、レポートや論文にどれだけ時間を割けるか、悩む学生も多い。大学生活のタイム・マネジメントは極めて重要である。

初学者は、とてつもなく大きな問題を取り上げることがよくある。その問題について調べようと思うと、莫大な資料を検討したり、壮大な実験やフィールド・ワークを行う必要があるといった問題である。そうでもなくても時間がないときに、そういうテーマを取り上げては、その議論は必ず破綻する。

また逆に、あまりにも特殊すぎる問題で資料がまったく手に入らないとか、手に入れるのにとても時間がかかる場合もある。手に入る材料（資料）の量が使える時間に対して適切かということは、必然的に扱う問題の範囲を限定することにつながる。

資料が少なすぎる場合より、資料が多すぎる方が問題設定は正しい方角を向いていると言うことができる。そこから、手に入れられる資料・

文献と、自分の興味と能力をすりあわせ、与えられた時間を考慮しながら、テーマを絞り込んでいこう。

テーマを設定したのは良いが、情報を処理する能力がなく、研究ができない場合もある。例えば、ほとんどの文献が母語以外の言語で書かれている場合である。大学に入ったのだから、英語の資料くらいは自由に使えるようになって欲しいものだが、自分が堪能ではないロシア語やポルトガル語で書かれた文献を読まないとどうにもならない問題は、現時点ではテーマとして適切でない。

またある特定の学問分野にはその分野を扱う際にどうしても必要となるスキルがある。例えば、経済学における統計の知識や、音楽学における和声の知識などである。より大きな問題を扱うときには、これらの基礎的知識や基礎的技能が非常に重要な武器となる。これらなしには、それほど大きな問題ではなくても、ごく表面的なことしか言えないというケースは多い。**大学生活の早い時点で、自分が目指そうとしている学問の基礎的知識や技能の重要性に気がついて欲しい**。大学のカリキュラムが、初期の段階で、外国語や数学、情報科学、その他の基礎的技能を身につけることに重点が置かれているのはこのためである。もしそのような問題について研究したいと思ったら、とりあえず今学期のレポートのテーマにはせず、しっかり温めてその言語や技能の習得に励もう。君たちの柔らかい頭脳をもってすれば、そしてどうしても取り組みたいという情熱さえあれば、2 ～ 3 年後には君たちはその情熱を土台に見違える人間になっているに違いないからである。

もっとも、適切なテーマ設定が最初からわかっていることなどあり得ないし、その必要もない。最初の時点ではどんなテーマでも良いから、とりあえず決めたらそのテーマについて調べてみる。文献を調べたり、それらを読み進めたりする過程で初めて、初めはぼんやりと、そして後にややはっきりとそのテーマが適切なものかどうかが見えてくる。上記の三箇条に照らしてみて、これは難しいぞということがわかれば、それだけでも前進しているのだ。その過程で、問題を絞り込んでいったり、方向転換の必要性に気がつくことは、大いなる「進歩」なのである。